

大規模修繕工事は、難しいのか？



NPO法人リニューアル技術開発協会

理事・リニューアル技術教育部会長 山田 昌喜

筆者が、現職である大規模修繕工事の設計監理及び技術者教育を始めて14年目となるが、その間、施工管理の精度が著しく改善されたとは言えず、寧ろ後退してしまっていると思われることも多くあるのが現状だ。

今までも施工管理について述べてきたが、改めて大規模修繕工事の施工管理について見直してみたい。

施工管理のスタートは、工事請負契約内容を把握すること、と筆者は考えている。

契約内容を履行することが絶対的に守らねばならないものであるということは、異論はないだろう。

しかし、合格と不合格の共通認識が取れていないと感じることが、どの現場においても発生してしまう。



写真② 右補修部接写

補修部の肌合わせは難しいのか？

塗装面の下地補修工事において、【肌合わせ】と言われる項目がある。

肌合わせは、何をもって合格とするのか。どうすれば、施工者・監理者・施主が共通認識できるのか。

この問題について、多くの人が【補修部が目立たないようにすること】【周囲の塗装肌と合致させること】と答



写真③ 左補修部接写



写真① 肌合わせ試験施工

え、そのために試験施工を行うと言うであろう。

しかし、現実には、補修部の肌合わせについて、指摘が一つも出なかった現場は、筆者の経験上ほぼ無いと言える。

写真①は、補修部の肌合わせの試験施工事例だ。監理者定例で提示された肌合わせ状態であり、写真①では分かりにくいかもしれないが、写真②の接写では、肌合わせ中央部の模様が周囲よりも小さく、補修跡が目立つで